

特 別 展 示

骨が語る人の 生と死

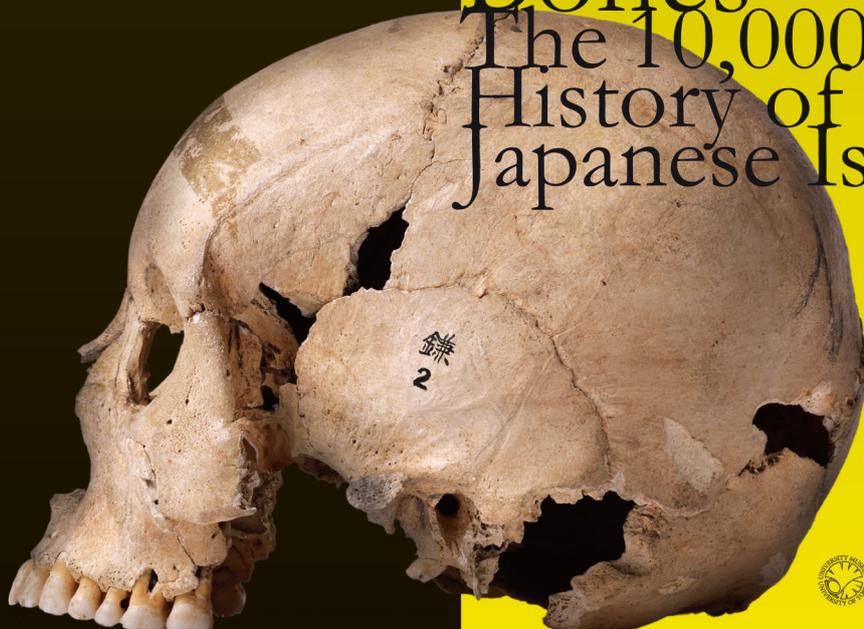
東京大学総合研究博物館
本館企画展示室

東京都文京区本郷 7-3-1
主催：東京大学総合研究博物館

2023.9.30sat
2024.2.22thu
会期延長
2024.5.16thu

日本列島一万年の
記録より

Human Life
and Death as
Told by Ancient
Bones
The 10,000 Year
History of the
Japanese Islands



あなたの知らない、祖先たちの素顔
この列島で、彼ら彼女らは、
どんな時代をどう生きたのか？
骨が語る、多様な生き方と考え方
祖先たちの声を聴き
足元からヒューマン・ダイバーシティを
問い直す

2023.9.30sat

本館特別展示

骨が語る「生と死」日本列島一万年の記録より

海部陽介

はじめに：足元からヒューマン・ダイバーシティを問い直す

縄文時代といえば、奇抜なデザインの土器や土偶をイメージする人が多いのではないだろうか。しかし私たちは、それを創った縄文人の素顔をどれだけ知っているのだろうか？ 鎌倉時代といえば、幕府を築き運営した、あるいは共謀して裏切った武将たちを思い浮かべるかもしれない。その一方で私たちは、当時の一般の人々については何を理解しているのだろうか？ 産業や流通が発達した江戸の町人のイメージは、浮世絵や落語から伝わってくる。しかし当時は、日本史上最も低身長で、小顔化が進行し、歯並びの悪化が目立つ時期だったことを知っているだろうか？ このような祖先たちの知られざる姿を直接教えてくれるのが、彼ら彼女らが残した骨、つまり遺跡から発掘される古人骨である。

東京大学総合研究博物館には、1877年のE・モースによる大森貝塚の発掘以来、日本各地で収集されてきた古人骨が数千体分保管されている。本展では、そうした骨が語る祖先たちの「生き様」、「死

との向き合い方」、そして「病魔との闘い」を紹介したい。本展が、列島内でも実に多様であった人々の生き方や考え方に触れ、ヒューマン・ダイバーシティの本質をとらえ直す機会となれば幸いである。

第一部：骨が語る「生」

日本史上最高のマッチョマン / 筋骨たくましい縄文人の中でもとりわけ頑丈な集団がいた / 骨があらわす縄文の生活 / 大けがを負って / 彫りの深い顔立ちの縄文人は歯並びが整っていた / 奇抜なデザイナーたちには不思議な習慣があった / 戦争の証拠がなく平和にみえる縄文時代に暴力行為はどれほどあったのだろうか？ / 激動する社会のはざま①渡来系集団の到来(弥生時代) / 激動する社会のはざま②変わる顔つき(古墳・飛鳥・奈良時代) / 長頭で反った歯だが歯並びの乱れは少ない鎌倉時代人 / 豊かさに伴った長寿化と小顔化と歯並びの悪化と低身長(江戸時代)

ここでは本展で扱う上記のテーマのうちいくつかを紹介する。

<マッチョ縄文人：図1> よく運動

すると、骨は太く頑丈になる。縄文人の四肢骨は平均的に現代人より太いが、そんな縄文社会にも集団差があった。上腕骨を比べると、男女とも、内陸より海辺に暮らす集団の方が太いのである。これは積極的な海洋活動の結果と考えられるが、その中でも愛知県渥美半島の突端に位置する保美貝塚の男たちの腕は、他の海浜集団と比べてもとりわけ太かった。保美貝塚の考古学的分析からは、伊勢湾のみならず外洋(遠州灘)での活発な漁や、近畿地方の二上山からの石器石材(サヌカイト)の海上運搬の証拠が得られている。おそらく保美村の男たちは、丸木舟を駆使して頻繁に外洋へ出ており、それがこの際立った特徴を生んだのだろう。

<身を飾る風習：図2> 腕輪、耳飾り、入れ墨などの風習が知られる縄文人だが、彼ら彼女らの身体装飾はそれだけではなかった。ここで紹介する抜歯は、健全な前歯を抜く風俗で、集団構成員の大半にほどこされており、成人儀礼などの意味があったらしい。この風習は縄文時代の中期以降に広く流行し、晩期の東海地方では上下合わせて8本の歯を抜く



図2 一部の歯を抜き(風習的抜歯)、切歯に刻みを入れた(又状研歯)縄文人の男たち。又状研歯は特定の人だけが許されていた習俗のようだが、愛知県伊川津貝塚で見つかったこの3人は、1つの墓に合葬されていたことで有名である。

図1 現代人男性の骨格模型と比較した保美貝塚(愛知県)の男性の上腕骨。

図3 時代によって大きく異なっていた歯並びとその背景にあるもの。

下：縄文人，中央：鎌倉時代人，右上：鎌倉時代の箸（所蔵：鎌倉市教育委員会），右下：江戸時代人（所蔵：国立科学博物館）。



など過激化した。叉状研歯^{さじょうけんし}は切歯に刻みを入れるもので、縄文時代晩期の東海～近畿地方にあった特異な習俗である。集団内の一部の人だけにみられるので、特別な地位や身分を表していたとの解釈がある。

＜変化した歯並び：図3＞ 縄文人の歯並びは、現代人からみると異様である。歯の摩耗^{さうもう}（咬耗）が著しく、上下の切歯の先端^{せつたんこう}どうしがかみ合っている（切端咬^{せつたんこう}合）が、実は先史時代においては、世界のどこでもこれが人類にとってふつうの姿だった。さらに歯並びが美しい（大きな乱れがない）ことも特徴だが、これはよく噛む食生活のために縄文人の顎骨は発育良好であったことと、激しい咬耗が関係してそうなっているらしい。

この状況は歴史時代に大きく変わった。鎌倉時代では、歯並びは悪くないが、反っ歯（出っ歯）の人が増えた。前歯の咬耗が減ったことが主因でそうなったのだが、この時期には箸が普及していたことが一因となり、前歯をあまり使わない食生活が一般化したのだろう。

現代のように歯並びの乱れが目立つようになったのは江戸時代からであるが、その理由は次の現象からさぐることができる。江戸時代には前歯も奥歯も咬耗量が減る傾向があり、摩耗性の低いやわらかい食物が一般化していた。同時に顎骨が小型化し、特に貴族や武家の間では「小顔化」が進行したことがわかっており（図4）、よく咬まない食生活のせいで顔面骨がいわば「発育不良」を生じていた。つまり、歯のサイズは変わらないまま、顎骨が大きく成長せず、歯の摩耗も減ったために、歯が歯槽骨に並びきらなくなったということらしい。

＜暴力の証拠？＞ 弥生時代と異なり、縄文時代には集団間の組織的な戦闘行為（戦争）が行われた証拠がない。それでは縄文人は、暴力とは無縁でいつも平和な暮らしを送っていたのだろうか？

結論から言えば、縄文人の社会にも個人的な暴力は存在した。ただし現時点では、その実態はまだ明らかになっていない。特に注目される例として、頭骨に激しい力で穴があけられた例がいくつか知

られているおり（図5）、その分析が待たれる。

第二部：骨が語る「死」

盤状集骨葬（縄文時代） / 廃屋墓（縄文時代） / 多人数集骨葬・犬の埋葬（縄文時代） / 横穴墓（古墳・飛鳥・奈良時代） / なぜ人骨がないのか（奈良・平安時代） / 共同墓地の出現と合戦の犠牲者（鎌倉時代） / 誰もが墓地に葬られる時代の到来（江戸時代）

近い人が亡くなると、残された者たちはその死と向き合うことになるが、そのあり方は、時代や地域によって想像を絶するほど多様だった。本展で紹介する例をご覧ください、人の死への観念が列島内でも大きく変わってきたことを実感いただきたい。

縄文人は、集落の中に墓地をつくったり、一度埋葬した故人の骨を取り出し他人のものとして混ぜて幾何学的に再配置したりするなど、現代の常識では考えられないようなことを行っていた（図6）。総じて葬送儀礼は複雑多様で、生者と死者の距離が近かったように思える。



図4 小顔化とおはぐろの痕跡を示す江戸の女性（所蔵：国立科学博物館）。



図5 頭頂部に謎の2つの穴があいていた縄文人男性。

Ouroboros



図6 14人以上の遺骨を五角形に再配置した縄文の墓（愛知県保美貝塚）。一部の骨は元来の位置から若干動いている（写真：田原市博物館）。

図7 鎌倉の集団墓地から出土した合戦の犠牲者と思われる頭骨。刀、槍、鈍器などによる傷痕がみられる。



大陸から影響を強く受けた弥生時代になるとその関係性は変化し、次の古墳時代には墓が集落から明確に分離するようになる。ただしこれらの時期については、まだわからないことも多い。例えば、古墳時代の墓としてよく知られるのは巨大な墳丘や小規模の横穴墓などだが、前者は王族や貴族が権威の象徴とし、後者は官人など一定の有力者が親族単位で使ったものと考えられる一方、庶民がどこに葬られていたのかは定かでない。

その後の奈良～平安時代は、どの社会階層においても、人骨の出土例が極めてまれな時期となる。それは上流階級の間で薄葬思想（儒教の影響）や火葬（仏教の影響）が広まっただけでなく、庶民は遺体を山野などに放置することが多かったからで、つまり墓が重要視されない時代風潮があった。

庶民による遺体遺棄は中世にも行われていたが、この時期に入ると、集落の周縁に共同墓地がつくられるケースが出て

くる。鎌倉幕府のお膝元、鎌倉市の由比ガ浜もその一例で、そこからは庶民や合戦の犠牲者と思われる人骨が多数みつかっており（図7）、当時の世相を伝えてくれている。

墓地をつくる風潮がさらに加速し、街中の寺の境内に墓が造られるようになったのは、檀家制度などのもとに仏教が庶民生活に浸透した江戸時代のことである。江戸の墓は被葬者の身分を反映しており、ふつう武家は甕棺に、一般の町人は円形木棺（早桶）に納められるといった区別があり、下層民の墓域では無秩序な埋葬が行われていた。それでも、若年者や身寄りのない者も含めた大勢の一般大衆が墓地に埋葬されるようになったことは、日本史における大転換といえる。

第三部：病との闘い

がん / 結核 / 梅毒

骨は、祖先たちが時代を通じて様々な病魔と闘ってきたことを教えてくれる。パンデミックにより外から日本列島へ持

ち込まれた感染症もあれば、徐々に身体を蝕む不治の病もあった。

梅毒はトレポネーマ原虫による感染症で、感染後数年を経た第3期になると骨を含む全身で破壊性病変が進行し、致死的症状をもたらす。主に性行為によって感染するので、原虫は外気に触れることなく人体内にとどまり、人を介して世界中へ広がることができる。梅毒の起源は不明だが、都市化による人口集中が感染機会を広げ、15世紀末にヨーロッパで大流行した後、ヴァスコ・ダ・ガマが確立したインド航路をつたってアジアへ飛び火した。文献による日本最古の感染記録は室町時代で、江戸時代の江戸では大流行したとされるが、それは人骨からも確認されている。日本国内における梅毒感染状況は戦後に改善したが、2010年以降、特に若者の間で急増しており、注意が呼びかけられている。



（本館教授／人類進化学）

東京大学総合研究博物館 特別展

『骨が語る「生と死」 日本列島一万年の記録より』

会場：東京大学総合研究博物館・本郷本館

会期：2023年9月30日～2024年2月22日

開館：平日と9/30～12/23の土曜日

※詳しい日程・イベント・参考文献等についてはウェブサイトをご覧ください



企画/構成：海部陽介 フロアデザイン：洪 恒夫

グラフィックデザイン：関岡裕之 動画製作：松本文夫

協力：国立科学博物館、福島県立博物館、鎌倉市教育委員会、田原市博物館、

三鷹市教育委員会、神奈川県立歴史博物館、慶安寺

近藤 修、坂上和弘、キャサリン・ハンブソン、平野力也、皆川真莉母、

中村 凱、高木蔵之助、中村謙伸、学部生の皆様

＜企画者紹介＞

海部陽介 東京大学総合研究博物館教授。専門は人類進化学。理学博士。化石の研究とフィールドワークなどを通じ、約200万年におよぶアジア人類史を研究。国立科学博物館在籍時に「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」（2016～2019）を代表として実行。著書に『人間らしさとは何か』（河出書房新社）、『サピエンス日本上陸』（講談社）、『日本人はどこから来たのか？』（文藝春秋）など。日本学術振興会賞（2012）、海洋立国推進功労者表彰（2021）などを受賞。